
ありえない、本当の話 その2. 怪

湊 かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありえない、本当の話 その2・怪

【Nコード】

N3769E

【作者名】

溪 かおる

【あらすじ】

10年前の怪が怪により怪となる。

「怪」ふしぎなこと。あやしいこと。 <大辞林 大二版>

真夜中にけたたましく、電話が鳴った。

夫や子供たちの部屋の電話<子機>は、親機が数回鳴った後に一斉に鳴りだす。

その前にも思い、寝ぼけ眼で、必死に、そして緊張感を持って電話<親機>をとる。

最近では、電話といっても皆それぞれの携帯電話を使う場合が多いので、

あまり家の電話になる事は無い、鳴るのは昼間に、保険の勧誘や訳の判らない詐欺のような電話ばかりである。

しかし、真夜中の電話となると、何か不吉な翳^{かげ}りが頭を過ぎ^よる。

夫の母は末期癌で大学病院に入院中。

夫の祖母は、夫の母（祖母の娘）の入院を界に元気ではあるのだが老人施設に入所中。

私の両親は70代、認知症の父を自宅で母が介護している、所謂^{いわゆる}、老老介護である。

私の家族は皆、それぞれ部屋で休んでいる。

長男の帰宅が遅く心配したが、少し前に泥酔して帰宅した。

次男も長女も風邪気味とかで、彼ららしからぬ時間に休むと、それぞれの部屋に戻った。

夫は、いつものように大きな音でテレビをつけたままの高斟である。

どんな形であれ、家族が皆、家に居るのは心落ち着く。

電話の向こうから、緊張感の無い声が聞こえてきた。

「あさつゆホーム ですが、鈴井さんのお宅ですか？・・・」と。

直ぐに、祖母のことだと、判断できた。

相変わらず緊張感の無い声で、祖母が入院したことを伝え、理由は、微熱だが丸2日続いているので、様子を見ていたのだが、急に熱が38度まで上がってきたのと嘔吐があったので、

同じ医療法人の病院に観察の為に入院した。との話であった。

ここに介護保険と医療保険の怪がある。

介護保険で老人施設で入所しているものが、病院に入院することによって医療保険に変わる。

それによって、老人施設から退所となり、入院患者となるのだ。

厳密な線引きをするところ、曖昧なところ、色々と聞いていたが、

あさつゆホーム は前者のようである。

今すぐ、病院に来て家族が対応するようにと指示をされた。

医療保険に変わってしまった患者に、介護保険の職員は手を煩わされたくない。

・・・そんな感じである。

そして老人施設からは退所になるので、

荷物を取りにくるよう。とのことであった。

流石に荷物の引き取りは明日でよいとの事だ。

家族は皆、電話のことも知らず熟睡しているようであったので、夫だけを起こして、そのことを告げ私一人で病院に向った。

あさつゆホーム からの緊張感の無い電話で、私の心は冷静になっていた。

その感じのまま、夫に伝えたように思う。

夫には明日の仕事があるのだから。

私の両親は、ほんの数メートル離れたところに住んでいるのだが、車を動かしたとたん、真夜中に歩く父の姿を遠くに見つけた。

足の悪い父の為に、子供たちで贈った杖には、反射板が付けられていた。

暗闇に光る杖を見つけて、直ぐに父とわかった。

俳諧が始まったのかと思いい心配したが、本人曰く朝の散歩とのこと。朝にしても、3時半は早すぎないかと思いつつ、

父を連れて自宅に戻ったのだが、母は熟睡していた。

仕方なく、父を連れて行く。とのメモを母に残して、父と病院に向った。

流石に真夜中、普段なら30分近くかかる道のりだが15分程で病院に着いた。

しかし、真夜中の運転は危険だった。

まるで無法地帯のようである。

点滅信号も気にせず突っ走る、ウインカーは出さない、妙に目を刺す白い光を放つブレーキランプ。

不気味な車が、列をなす。

爆音をたて、音を撒き散らし、命を懸けて走り去る。

異国の地のような、暗闇の怪。

父に祖母入院の事情を話すと、案外正確に把握できているようだ。

父の認知症には波がある、今日の状態はすこぶる良いので、安心した。

病院に着き、緊急用の処置室に入ると、驚きの喧騒であった。

大暴れする祖母を看護師さんや医師が皆で押さえ込んでいる。いつも、もの静かな、小さな小さな祖母。

身長は150cmにも満たない、体重も30kg台と聞いていた。

そんな小柄な祖母を、皆で押さえ込んでいる意味が判らない。

私の目からもすっかり見て取れる祖母の徒^{ただ}ならぬ渾身の抵抗。

一体、何がどうしたというのだ。

父と私は祖母の枕元に走り寄った。

祖母の目はしっかりと正気を保っているのだが、戦^めう「眼」であった。

普段の柔和な眼差し、細い目をいつそう細くしての笑顔しか知らない私が、初めて垣間見た「眼^め」

その「眼」はキリつとし、そして妥協を許さない、頑固な鋭い光を放っていた。

元氣そうで安心したが、それとは全く違う、緊迫感、切迫感を感じた。

よくよく、皆の様子を観察してみる。

一体この騒ぎは何なのか。

答えは簡単であつた。

祖母はトイレに行きたいと訴えている。

看護師は今は処置中なので、

当てている紙オムツにするように祖母を諭す。

トイレ、オムツ、トイレ、オムツ。

訳のわからない水掛け論の怪。

どちらもどちらだと思つた。

点滴や心電図等の装着があるので、看護師の言い分も解る。

しかし、祖母の末期癌の娘は、母との別れを予見して、

手厚い介護を誇る老人ホームを選びに選んで入所先を決めた。

そのホームでは併設のヘルパーや看護師養生施設があり、

介護実習の為、いつも若い介護者の笑顔に満ちていた。

若い、意欲ある、学ぶ立場の学生達は、

誠意を持って介護に当たっていた。

リユウマチの持病を持つ祖母を、毎回トイレに

車椅子で連れて行き、用を足すのを手伝ってくれた。

明治生まれで、有名な武將の末裔の祖母は

紙おむつへの抵抗は、ただならぬものがあつた。

そのために、祖母の介護が娘の入院によって

どうしても不可能になつた程である。

日や時間を決めての、ヘルパーの派遣だけでは不安だったのだ。

様々な事情を知る私ではあるが、祖母の耳元で、色々処置中なので今だけは、おむつにしていただけませんか、と伝えてみた。

父を待合のイスで待っていて貰おうと思い、一旦処置室から出た。

父と、どっちもどっちだねと苦笑いで話をした。

私としては一寸トイレに行かせてやってくれればと思うのだが、持病のリユマチがあるのでトイレに行くにはそれなりの介護が必要である。

今日の今、初めて観察入院できている身である。

その辺の細かい事情までは話す時間はない。

あの狂騒の中で、トイレに連れて行って欲しいとは情けないが、どうしても伝えられなかった。

父をトイレに連れて行き、その後待合のイスに座らせた、夜中で他に誰もいない、疲れたら長椅子で横になればいい、と告げて、私は処置室に戻った。

処置室の狂騒は更に過激になっていた。

その反面、祖母は動いてはいない。

医師から呼ばれた。

隣の部屋でレントゲンを見ながら、

医師は開口一番に「骨折していますね・・・」

・・・？・・・

訳のわからぬ言葉の怪。

ひと言残したまま、話は変わり、今までの経過の説明に入った。
数日間にわたる微熱は肺炎の為で、

嘔吐による誤嚥性の肺炎とのことであつた。

そのほかにもMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌・院内感染
の起因菌）があり、

結核も疑われるとの事。

只、現在心肺の状態が大変悪いので予断を許さないとか。

驚いた、さつきまであんなに暴れていたのに・・・。

祖母は夫の祖母である。

医師に確認をした。

夫を呼ぶべきかと尋ねると、呼んでくださいとのこと。

直ぐに夫の携帯に電話を入れた、夫は取るものもとらず駆けつ
けて来た。

末期癌で入院中の夫の母に連絡はしないことに、その場で私たちは
決めた。

そうこうしている間に朝を迎え、そして祖母は亡くなってしまつて
いた。

空が明るく白んできた。

静かな透明な光が、祖母の果たされた篤い信念を照らす。

後のことは、全て夫に任せて、

病院のソファで寝ている父を起こして、一旦自宅に戻った。

道路は淡い、爽やかな光に穢れ^{けが}が取り除かれたかのように
車は皆、秩序良く、朝靄^{あさもや}の中を整然と走っていた。

小さい小さい祖母の小さい小さい葬儀が終わった。大きな騒動の中。

夫の母の弟は既に、癌で亡くなっている。

普段は全く母の義妹に連絡を入れることは無かったのではあるが、
夫の母の入院の際に、連絡を入れた。

その後、見舞いという名目の中、色々な理由で
入院中の母から、金を受け取っていた義妹。

次男の学資が足りない、長男が結婚する、自分の家は新しくお墓を
作ったので、

夫の母の実家の墓は永代供養にしたい、云々……理由はどうあ
れ、

入院中の末期癌の母から多額な費用を貰っていく義妹に
母の介護に当たっていた私は呆れた。

義妹は通夜に呼ばれた。

自身が喪主であることを聞き憮然とした。

末期癌で入院中の母に代わってであるので仕方が無い。

仕方が無いことへの理解ができないようであった。

遂に、夫が怒鳴った。

仕方が無い、仕方が無いので仕方なく喪主を務めた。

骨揚げの際、そんなに沢山の骨は入らない、と言い放った。

愛の無い葬儀であった。

故人の名前すら、皆うる覚えだ。

戸籍上の名前とは少し違った漢字を好んで使っていた祖母。そんなことは誰も知らないようであった。

葬儀後の法要に関しても、一つ一つを簡略、出来れば省きたいと僧侶に交渉していた義妹。

美しく華やかな義妹の、親戚中からの冷たい視線に耐えられないからと

涙を湛えながらの僧侶への交渉は功を奏し、簡略化を極めた法要は、全て瞬く間に終わった。

その数日後、夫の母は息を引き取った。

そして、10年。

現在、特別養護老人ホームに入所中の父を、昨日訪ねた。

今日の父はとても、饒舌であった。

認知症も殆ど感じない程に、明確に言葉を発し続ける。

あまりにも言葉が淀みなく湧き出るので、

反対に認知症の悪化を心配した。

「それにしても、おばあちゃんが亡くなった時は大変だったな。よく病院を訴えなかったもんだ。

ベットから大きいおばあちゃんが落ちたと聞いたときは

驚いた。病院も病院だ、トイレに行きたいといって暴れて

落ちた、は無いだろう……お前達もよくあのまま……」

憤りの為なのか、延々と同じことを繰り返し、繰り返し話続ける。

私は、初めてあの時、医者が呟いた「骨折していますね・・・」の言葉の意味が、判った。

父はあの時、待合室でベツトから祖母が落ちたと聞いたのであろう。

トイレに連れて行けない、深い訳があったのだ。

あの時、私には微塵もそのことを感じさせなかった父。
何食わぬ顔で小さい葬儀に参列して、そして何も言わずに
大きな騒動を見つめていた寡黙な父。

認知症の為か、末期癌の母を抱えていた私たちへの配慮からなのか、
これほどの憤りを感じていながら、
あの時、私は父から何も聞いてはいない。

全て、認知症の作話^{さくわ}か。

今となつては、全てが怪。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3769e/>

ありえない、本当の話 その2. 怪

2010年10月20日14時18分発行